

一八八五年八月三十一日(月)

ジャンマシユタミーの日に南神寺ドツキネーシヨルにおいて——信者たちと共に

スポドゥの訪問——プールナ、校長、ガンガーダル、クシーロド、ニタイ

聖ラーマクリシユナはいつものあの馴染深い部屋で休んでおられる。夜八時ころ。月曜日。バッド
口月十六日、スラボン黒分六日目。一八八五年八月三十一日。

タクルルは喉のどが悪い。しかし一日中、信者たちが少しでも良くなるようにと思っておられる。と
きどき子供のように病氣のことを気になさる。——かと思うと、すぐきれいに忘れて神の愛にお酔い
になるのだ。そして信者たちに愛情を示されて、やさしい母親のように、子供たちのことが気が気で
ないご様子である。

二日前の土曜日、プールナから手紙が届いた——「私はうれしくてたまりません。うれしさのあまり、
夜も時々眠れなくなるほどです！」

タクルルは手紙の内容をきかれて、こうおっしゃった——「わたしは肌毛が逆立ってきたよ！
ずーっと後まで、彼はこの喜びを持ちつづけるだろう。どれ、その手紙を見せてごらん」

手紙を受けとって、^{てのひら}掌でなでまわしながらおっしゃる——「普通の手紙なら触れないんだが……。これは特別いい手紙だからね」

この夜、少し眠られた。突然、体到大汗をかいて、寢床から起き上がっておっしゃった。——「この病気は、治らないと思うよ」

この言葉をきいた信者たちは、胸もふさがる思いだった。

大聖母^{シユリースユリースマ}(ホーリー・マザー)がタクールのお世話をするために南神寺^{ドックネーシヨル}に來られて、ひっそりと音楽塔^{ナハバト}の一室に住んでいらつしやる。そこに彼女が住んでいることを、大方の信者たちは気付いていない。一人の婦人信者(ゴラーブ・マー)も、音楽塔^{ナハバト}に数日泊まっている。そしてタクールのお部屋に始終來ては、タクールにお会いしている。

タクールはその婦人信者に、昨日の日曜日、こうおっしゃった——「あんた、ずいぶん何日もここにいるが、人は何て思うだろうね? 十日ほど家へ帰つていなさいよ」校長は、このやりとりを一部始終聞いていた。

今日は月曜日。タクールは病床についておられた。夜はまもなく八時になるところである。タクールは小寝台に横向きになり、頭を南に向けて眠つていらつしやる。ガンガータル(後のスワミアカンターナンダ)が夕方、校長といつしよにカルカッタから來ていた。彼はタクールの足許^{あしもと}に坐っている。タクールは校長と話をはじめられた。

聖ラーマクリシュナ「若いのが二人來たよ。シャンカル・ゴーシユ^(訳註)のひい孫(スポドウ)と、もう一

人は同じ町内に住んでいる少年(クシード)だ。二人ともいい子だ。わたしは病氣だから、お前のところに行っているいろいろ教えてもらうように二人に言っておいた。お前、ちよつと面倒みてやってくれ」
校長「かしこまりました。私どもと同じ町内の少年たちでございます」

〔タクルの病氣の始まり——バガヴァン医師——ニタイ医師のこと〕

聖ラーマクリシュナ「いつかまた、体到大汗をかいて目がさめた。この病氣はどうなることやら!」
校長「いちど、バガヴァン・ルドラに診察してもらうように、私どもでとり決めました。彼は医学博士を取った人で、大そう優秀な医者でございます」

聖ラーマクリシュナ「ずい分かかるんだらう?」

校長「普通は二十か二十五タカだそうでございます」

聖ラーマクリシュナ「じゃ、やめとけ」

校長「はあ、でも、私どもはせいぜい四、五タカ払うつもりでおりますから——」

聖ラーマクリシュナ「おやおや、どうぞ、特別のおはからいであの方を診察していただきたい。なんて言うつもりかね。こちら(タクル)のことは、何も聞いてないのかい?」

校長「多分、聞いている筈でございます。だいたい、診察料をとらないことで承知したのでございます。私どもは、少しは払うつもりでございます。そうすれば、又来てくれるでしょうから——」

聖ラーマクリシュナ「ニタイ(医師)に来てもらえば? 彼はいい医者だよ。でも、医者たちが来て、

第21章 ジャンマシュタミーの日に南神寺において

何をするつもりだろうか？ 喉をいじくりまわして、よけい悪くするだけだ」

夜九時、タクールは麦粉スーシの乳粥バヤスを召し上がるため、お坐りになった。

それを召し上がっても、喉に何の苦痛もないようだった。タクールは嬉しそうに校長におっしゃった。「少し食べられたよ。すごく嬉しいよ」

(訳註) シャンカル・ゴーシユ——一八〇三年にカルカッタ、ターンタニヤにシッデーシユワリー(カーリー女神)を祀った寺院(カーリー・バリ)を建立した人物。彼の曾孫がスポドゥ・チャンドラ・ゴーシユで、後のスワミ・スボターナンダ。この寺院には聖ラーマクリシユナやヴィヴェーカーナンダも何度か訪れている。マヘンドラ・グプタ(校長)の家はこの寺院から1kmほど北に位置している。